ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　神楽が目の前にいることに気がついたものの、雅也はまだ夢うつつだった。忍者のコスプレをした友達がポケモンバトルを挑んでくる、そんな夢だと信じて疑わなかったのである。

「……ぅん」

　よくできた夢だなと感心しながら、雅也は神楽のバトルの申し出を受けた。腰についたボールを手に取ると、中のゼニガメがジタバタと動くのを雅也は感じる。どうやら、起こされて不機嫌らしい。

「ルールは三対三のシングルバトル……だけど大丈夫？」

「ぅん」

　神楽の問いに頷く雅也。だが、神楽は心配そうな顔で雅也を見ていた。余りにも雅也が眠そうなので、ちゃんと戦えるのかどうか、不安なのだろう。

「ゼニガメ、ゴー」

「行くぞイトマル！」

　互いのボールが地面に落ち、二匹のポケモンが出てきて戦闘が始まった。そしてその瞬間、神楽は自分の心配が杞憂だったことを知る。

「ゼニガメ、アクアジェット！」

　機嫌悪くボールの中でジタバタしていたと思われていたゼニガメだったが、実は、これから始まる戦闘に興奮していただけらしい。地面に立ち、雅也の指示が聞こえた刹那、全身に水を纏って神楽のポケモンに突っ込んでいった。

　神楽のポケモンは、形容するなら『緑色の小さな可愛い蜘蛛』といった所だろう。いとはきポケモン、イトマルは、律儀に神楽の指示を待っていた。

　しかし眠そうな割に、勢いのある先制攻撃を仕掛けてきた雅也に、不覚にも神楽は驚き、声を出せないでいた。それもそのはず。結構な期間一緒にいる雅也と神楽だが、実はポケモンバトルをしたことは一度もない。二人共、基本的に学校の生徒相手にバトルを仕掛けることは控えるよう厳しく言われているし、そうでなくとも、小学四年生になるまでは、生徒が学校でポケモンバトルをすることは禁止されているからだ。その理由は当然、前者は修行しているポケモントレーナーと、そうでないポケモントレーナーとでは実力が違いすぎて洒落にならない怪我をさせてしまうからだし、後者は未熟な生徒同士のバトルで何かあった場合、学校は責任を取れないからである。そして雅也と神楽は、どういうわけかプライベートでは時間が合わないので、互いの家に遊びに行った事も無い。

それ故、雅也はずっと、神楽と戦える日が来ることを望んでいた。彼はまだ、今も尚ここが夢の世界だと認識しているのだが、それでも念願の神楽との戦いに燃えており、全力で相手をする所存だったのである。夢の中の出来事だと思っているので、手加減するという考えは、彼には当然無い。結局、ゼニガメの『アクアジェット』がイトマルに命中し、イトマルは縦に転がりながら後ろに吹っ飛んだ。その勢いたるや、もしイトマルが一般的なポケモントレーナーが持つイトマルと同程度しか鍛えていなければ、今の一撃は中々の怪我を負わせかねない威力である。

だがゼニガメは、相手のイトマルが自分と同じくらいの強さであると見抜いていた。ゼニガメは主人と違い、ここが現実世界だとはっきりと分かっている。吹っ飛んだイトマルを見ても安心することなく、姿勢を低くして戦闘態勢は崩さない。さっきの一撃はむしろ、少し浅かったとさえゼニガメは感じていた。

　そこでふと、ゼニガメは自分の体や甲羅に、何本かの細い糸がくっついているのを見た。触ってみると、少し粘着く。なんだろうと思った瞬間、ゼニガメは自分の体が少し引っ張られたのを感じた。イトマルが空に浮いているのが見え、糸がイトマルのお尻から出ていることにゼニガメは気づく。空中で、何本かの線がキラリと光ったのも見えた。どうやら、近くにある岩や木にも糸を巻きつけているらしいと、雅也達は知った。

「油断した……けど、もうあんな攻撃は受けない！　イトマル、毒針！」

　神楽が、足元近くまで垂れ下がっている緑色の鉢巻をギュッと締め直し、そう叫ぶ。イトマルが空中で、口から紫色に光った細い針を、ゼニガメに向けて飛ばす。ゼニガメは瞬時に、殻に篭って『毒針』から身を守った。

「高速スピン！」

　そしてそのまま回転するゼニガメ。雅也もゼニガメも、この時『高速スピン』でまとわりつく糸を断ち切るつもりだった……のだが、何故か回転のスピードが徐々に落ちていく。

「無駄だ！　粘着性の高い糸だから、そんなんじゃ切れないよ！　イトマル、ミサイル針！」

　回転するゼニガメに糸を巻きつけているにも関わらず、安定して浮き続けるイトマルは、そのまま空中で、口から無数の針をゼニガメに向けて飛ばす。さっきの『毒針』が殻に阻まれたのに何故……と雅也とゼニガメは思ったが、すぐに神楽とイトマルの狙いに気がついた。あの『ミサイル針』は、ゼニガメが頭や手足を引っ込めたところを狙っている。甲羅に阻まれるのなら、穴の空いているところを攻撃しよう、というものだろう。

「ゼニガメ、アクアジェット！」

　雅也はそう叫ぶ。回転していたゼニガメは、狙いをつけることもなく、適当な方向に『アクアジェット』を発射した。気が付くと、『アクアジェット』を解いたにも関わらず、ゼニガメは水中にいることを知る。どうやら、川の方向に飛んでいったらしいと気がついた。

　水の中でさえ、糸はまとわりついたままなのがゼニガメには鬱陶しく、陸に上がってから糸を何とかしようと水面に浮上する。だが、その時だ。

「ゼニガメ、ダメだ！」

　その声がゼニガメに届くより早く、無数の針が浮上したゼニガメに襲いかかる。まだ『ミサイル針』は続いていたのだ。

　顔面に何本かの針は受けたものの、再びゼニガメは水中に潜る。川を泳ぎながら、ゼニガメは顔に刺さった針を腕で払い取った。そろそろ『ミサイル針』の攻撃は終わっただろうと思ったゼニガメは、適当な場所を見つけ、再び水面に顔を出す。今度は『ミサイル針』が来る前に、逆に『水鉄砲』をおみまいしてやろうと、大きく口を開けた……のだが。

　水を吐き出すよりずっと早く、ゼニガメの顔に『ミサイル針』が飛んできた。

　危うく当たりかけたところで、ゼニガメは三度水中に身を潜める。今回は攻撃を受けなかったものの、それでもゼニガメは困り果てていた。イトマルの繰り出す針は小さく、そして早い。あまりに早いせいで、水面に当たると針が砕けてしまう程だ。水面に向けて撃たれた銃弾が、水中を通ることが出来ないのと同じ理屈である。それ故、水中まで攻撃は来ないので、こうして川の中に身を潜めていれば攻撃を食らう心配は無い。だが、水中まで攻撃が来ないので、イトマルの攻撃が終わったかどうかの確認が難しいのだ。そしてどうやら、ゼニガメは、イトマルは自分が水面に出るところを分かっているらしいと思っていた。夜暗い中、それなりに深く潜っている自分を外から目視するのは、中々難しいだろうとゼニガメは思っていたのだが……どうやら、何か別の方法で自分の居場所を知られているのでは無いかと、ゼニガメは考えていた。

　そして、その考えは正しい。雅也は既に気がついていたのだが、水中にいるゼニガメに上手くそれが伝わるかどうか怪しく、叫ぶのを躊躇っていた。現に、最初にゼニガメに、水面から顔を出さないよう何度も呼びかけていた雅也だったが、ゼニガメにはそれが伝わっていなかった。

　神楽とイトマルが、水面を見ながら微笑を浮かべている。どうやら、位置を特定するカラクリが分からなければ、ゼニガメはイトマルに攻撃出来ない。必然、やられるのはゼニガメだ。

　雅也は心の中で祈る。

　気づけゼニガメ、と。